「あなた自身ができそうな被災地の農業再生について」

少々本題からはずれてしまうが、講義を受け資料を読んだ今、普段のレポートを書く心持ちとは異なっていることを記しておく。正直、これほどアクティブに活動していて、学生の心に語りかける教授をあまり見かけたことがないように思う。私の知る努力が足りないことは否定しないが、溝口教授の言葉は心に自然と入り込むものがあった。

「私自身ができそうな」被災地の農業再生…普段なら正しいと思える一般論を書いて終わりにするところだった。しかし、

『「あなた自身かできる復興について考えを述べよ」という課題を出すのです。すると「自分は一生農業に携わることもなければ、被災地の村を訪れることもないだろう」という前提の上で感想を述べる文系の学生が多数いました。』
（資料：復興の農業土木学で飯舘村に日本型農業の可能性を見出す　より引用）

という文を読み、考えが変わった。ああ、まさにいつもの私の姿だと気付いたのだ。もっと身近に、もっと具体的に、もっと当事者として考えてみたいと思った。

本当に単純な結論を出してしまうならば、私ができる最善の手は、被災地を実際に訪れて現状を確認することだろう。何よりもまず、自分はあくまで当事者であり、決して部外者ではないことを認識すべきではないか。例え訪れることが難しいにしても、知る努力を怠ってはいけないと思う。マスコミにだけ頼っていると本当にただの部外者・傍観者になってしまうので、自分から知るために行動することで主体的になっていきたい。

次の段階としては、自分が知ったことを広めていくことが大切だ。私は折角大学生という立場なのだから、そこをいかしていきたい。ありがちなことかもしれないが、大人や行政が何かをやっていると聞いてもいまいち身近に感じることができないときがある。しかし、「大学生が活動した」「同世代が主張している」と聞くと、善かれ悪かれ注目してしまうものだ。それを利用する。例えば、Twitter・Facebook・ホームページを活用するのはどうだろうか。ホームページには詳しい情報をのせ、Twitter と Facebook は人との繋がりを増やすことを重点に置く。特に Twitter に関しては「ネタツイ」をしたり、中の人が面白

い・毒舌だと言われるくらい、ちょっとでもいいねやリツイートの数が増やすためになんでもやってみると良いだろう。

農業に関しては、あまり身近でない話になってしまうのだが、私が思うことを少しだけ述べようと思う。例えば飯舘村では、除染が進んだところで人が戻ってくるか微妙な面がある。しかし、人が戻らない限りそれは復興とはいえない。そこで、新しい形のビジネスを生み出すことが良いと思う。おそらく、飯舘村には余っている土地・耕作放棄地などが多くあるだろうが、地価は暴落しているのではないだろうか。そこで、多くの土地を買い占めてビジネスを始める。イメージとしては、作物作りから加工・出荷・マーケティングまで全てを統合した仕組み・会社をつくることが望ましいと思う。現在は一つ一つの分野が分離してしまっているケースが多く、利益を生み出すことが難しくなってしまっているように感じるからだ。全ての仕組みをお膳立てした状態で、農業に関わりたいと思っている人を募集する。仕事を引退した世代も農業をやってみたいと思っている人が少なからずいると思う。また、マーケティングの方では若い人・最前線で働いている人に頑張ってもらえると良いだろう。当然ながら、どんなに安全な作物を作ったところで日本人は「被災地」というだけで避けてしまいがちなので、マーケットは海外が良い。なかなか新しいビジネスに手を出すことは難しいと思うが、土地のしがらみの無い被災地はむしろビッグチャンスとも捉えられる。ピンチをチャンスに変え、むしろ日本に置ける新しいビジネスモデルをつくってしまおうという考えだ。

しかしながら、これでは机上の空論にすぎないので、とりあえずは被災地について関心を持ちつつ、大学で様々な知識を身につけていきたいと思う。忙しさを理由に行動しない保守的な態度から、思いつきでパッと出かけてしまうくらいのフットワークの軽さを身につけたいなと思う。部活で体力をつけている一方、その部活に体力を奪われている現状なので、より一層の体力作りが必要とされている気がしてならない。